

スターチス (リモニウム) シニユアタ

花材として広く浸透している切花の一つ。ドライフラワーとしても利用されている。
通称はスターチスだが、正式な属名はリモニウム。スターチスは旧属名となる。

学名 *Limonium sinuatum* イソマツ科
和名 花浜匙 (ハナハマサジ)
原産地 地中海沿岸

特性・半耐寒性の宿根草だが、園芸上の扱いは1年草
乾燥には強いが湿気を嫌う性質あり
開花特性・低温感応で花芽分化後、相対的長日
(脱春化あり) (限界日長8時間)
開花期・季咲きで6月
栽培環境・日当たりが良く、通気・排水の良い土壌



1坪あたりの植え付け本数・約12~16本/坪
1株あたりの採花本数・20~30本
価格・カタログ参照

播種

播種時期・6~7月
発芽条件・
発芽適温・20℃
発芽日数・約10日

定植

定植時期・9~10月
定植間隔・株間条間40cmの2条植え
畝・90cm
ネット・30cm角1~2段
マルチ・

肥料

元肥・暖地 N-P-K=0.8-1.5-1.2kg/a
高冷地 N-P-K=1.5-1.5-1.5kg/a
pH・6.0~6.5
追肥・N-P-K= - - kg/a
(追肥は肥切れの症状が出てから行う)

作型

◆暖地季咲き栽培・9月下旬~11月上旬定植、
翌2~5月出荷。11~3月上旬加温5℃以上。
15℃以上の加温は逆に品質が低下する。
(種子系は6~7月播種。以降は上記と同様)
◆暖地促成栽培・8~9月冷蔵苗定植、11~
翌5月出荷

(種子系は5~6月播種。冷蔵育苗は2℃で1ヶ月が目安)

◆高冷地栽培・2~4月定植、6~10月切り。
無加温。
(種子系は12~1月播種。播種時は20℃加温)

病虫害

灰色カビ病・多湿条件で発生しやすいので特にハウスを締め切る冬期に注意。
萎凋細菌病・発病した場合、菌は土壌中に残るので土壌消毒が必要となる。

うどんこ病・
ヨトウムシ・
ダニ・
コナジラミ・

出荷

ガクが十分に開いた状態で採花する。

管理

生育適温は5℃~20℃
5℃以下または30℃以上で生育阻害の恐れあり。
(特に5℃以下は褐変壊死することがあるので注意。また、夜温20℃以上で開花すると着花数が減る傾向にある)

水分管理は、定植前日から活着するまではたっ

ぶりと灌水し、生育後半に灌水を控え硬く作る。灌水を抑えることにより茎が堅く、茎のヒダ(翼)の肥大を抑えることができる。晴天時の午前中に灌水し、夕方にはやや乾き気味になうようにすると灰カビ病の抑制にもなる。

品種間差があるが、低温や窒素多過でもヒダは大きくなるので注意。窒素多過はカルシウムの施用である程度硬くすることが出来るが、基本的に元肥を入れすぎないことが絶対条件となる。ただし、乾湿の差が大きいと葉の黄変や生育の遅れの原因となる。

茎が縦にひび割れた場合はホウ素欠乏を疑う。

花芽を持つバーナリ(春化)の条件は2℃の条件下で1ヶ月低温を受けることが目安となるが、その効果は最低夜温25℃以上、最高昼温30℃以上、日平均気温25℃以上の条件下に5日以上遭遇すると打ち消される場合がある。これはディバーナリ(脱春化)と呼ばれ、展開葉が8枚以上になるとディバーナリしにくくなる。ディバーナリさせないため、定植は夜温が18℃以下になってからが目安となる。また、高温時に定植する場合は、圃場を定植2週間前からしっかり遮光(50%以上)し、定植前日に圃場にたっぷり灌水して地温をできるだけ下げしておくこと。

加温は最低5℃以上。15℃以上の加温は逆に品質を低下させる恐れがあるため行わない。加温のタイミングは11月頃から外気温が10℃を下回った頃。

基本的に相対的長日植物のため、低温遭遇後は長日条件で開花促進する。その効果は晩生品種の方が高い。

【2012/10/09 追記】

定植

圃場は定植前日には十分に灌水しておく。定植間隔は40cm×40cmが基本。密植すると病害虫の発生率が上がり、防除も困難となる。定植時に根を切ると、その部分から萎凋細菌病が侵入する恐れがある。根傷みには注意。定植後は十分に灌水し、活着後(約1週間後)は徐々に灌水を抑える。元々乾燥には強い植物だが、乾湿の差が大きいと葉の黄変や生育の遅れが出やすくなるため、適度に灌水する必要が

ある。

8~9月上旬の高温期に定植する場合は、根傷み防止のため寒冷紗等で日除けを行い地温を下げる。

定植後

灌水は株の太りを見ながら行う。追肥は肥切れ症状が見られたら行う。初期に抽苔してきた細い花茎は早めに除去し、株を太らせる。その際、ウィルス病の伝染防止のため、ハサミは使わずに手で折り取るとよい。温度管理は日中25℃、夜間最低10℃を目標に行う。日中の高温は品質低下を、夜温の低温は相対湿度上昇による灰色かび病の発生を助長するので温度管理は特に重要となる。ウィルス感染株、またはその疑いが強い株は即時抜き取り、圃場外にて焼却が望ましい。

収穫

早朝など、花卉に露が付いている状態での収穫は、灰色かび病の発生や水揚げの悪化を引き起こす可能性があるため避ける。